

小山登先生回想録

山本 誉

私は縁あって、2017年度後期にLEC会計大学院に入学しました。そして、会計コース専攻として、小山先生が主査の研究指導コースで2年間、小山先生に指導していただきました。

小山先生の研究指導を初めて受けた時の先生の印象は、「非常に熱量の高い、研究熱心な先生」というものでした。

小山先生は、税理士という実務家でありながら、その一方で、高いレベルの研究者でもあるという、いわゆる一般的な先生にはない、2つの才能をお持ちの、非常に優れた稀有な先生でした。

しかも、いつもゼミ生一人一人に、修士論文の作成に有用な研究資料や論文などを用意して配布してくださるといふ、ゼミ生思いの素晴らしい先生でした。

実務に精通する実務家であり、また、高いレベルの研究者でもありながら、それでいて、人格的にも立派な、心底尊敬できる素晴らしい先生でした。

同じゼミ生の一人は、小山先生のことを、「LEC会計大学院の良識そのもののような先生」と評していましたが、まさしく私もその通りだと感じました。

そんな小山先生でしたが、研究指導において印象深く残っている思い出は、小山先生は自分の関心ある話題がでると、「スイッチ」が

入って、時間の経つのも気にせず、熱く持論を語り続けられる「とてもアクティブ」な先生のお姿です。

研究指導のあとに別の授業が入っているときなど、ゼミ生たちが「先生、そろそろ次の授業がありますので・・・」と恐る恐る申し述べながら、小山先生に「スイッチを切って」お話を終えていただき、慌てて次の授業に向かったものでした。それぐらい、ゼミ生に対して「自分の持っているものをすべて伝えたい」と思ってくくださる「熱い先生」でした。

さらに、私は税法の授業も小山先生から受講しました。実務家、研究者であることに加え、「税法と会計」の両方の分野を究められているというのも、私にとっては驚きでした。まさに「スーパーマン」ではないかと思える先生でした。

もちろん、税法の授業の時も、「熱く語り続ける」小山先生がいたのは、研究指導の時間と同じでした。いまでも小山先生が熱く語り続ける姿は、脳裏に焼き付いて離れません。

大変失礼な言い方になるかもしれませんが、まさに小山先生は、「研究の虫」のような方でした。授業中に参考文献として配布される資料の数は、毎回本当に膨大でした。しかし、それも小山先生の生徒に対する「自分が持っているものはすべて伝える」という「教職者魂」の表れだったように感じます。膨大な授

業の資料を受け取りながら、「小山先生は、実務をこなしながら、これだけの資料をいつ集め、目を通され、研究されているのだろう」と思うこと、しばしばでした。

今考えると、小山先生は、本当に毎日、実務と研究の日々を過ごされていたのではないかと思います。並みの人間にはできないことだと、授業や研究指導のたびに、深く感嘆したのを覚えています。

ゼミ生や受講生から聞こえてきたのは、小山先生に対する尊敬の言葉ばかりでした。それほど皆から慕われていた素晴らしい先生で

した。

この回想文を書いていると、熱く語る小山先生の姿がまた浮かんできました。私は、LEC会計大学院で、小山先生のような素晴らしい先生のご指導を受けられて本当に幸運だと思います。

私はこれから、職業会計人として、小山先生の後姿を追いかけながら頑張っていきたいと思っています。

小山先生、本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。